

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：37402

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13792

研究課題名（和文）レトリカル・ヒストリーが失敗するメカニズムの探求

研究課題名（英文）An inquiry on mechanisms of failure of rhetorical history

研究代表者

松尾 健治（Matsuo, Kenji）

熊本学園大学・商学部・准教授

研究者番号：60805175

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：レトリカル・ヒストリー（RH）とは、組織の重要なステークホルダーを管理するための説得戦略として過去を戦略的に用いることと定義される。本研究では、研究期間中にRHが失敗するいくつかのメカニズムを明らかにした。主な研究成果としては、『組織衰退のメカニズム：歴史活用がもたらす罠』と題する単著書籍、Academy of ManagementのAnnual Meetingでの発表およびフルペーパーの論文、Journal of Business Researchに掲載された論文などが挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

組織におけるRHは、組織的同一化の促進、組織変革、経営戦略の正当化、顧客からのレピュテーション獲得、従業員の採用活動といった場面でしばしば実践される。だが、既存研究のほとんどは、経営者がRHを実践することで彼らの意図通りにステークホルダーの行動を促すことに成功している事例を取り上げてきた。とはいえ、RHは常に使い手の意図通りに機能するとは限らない。また、実務家もRHが失敗する可能性について考慮することはほとんどない。本研究は、RHが失敗する場合のメカニズムを明らかにし、理論的に貢献するとともに、組織の実務家はどのような状況で、どのように歴史を活用すべきかという実践的含意を導出した。

研究成果の概要（英文）：Rhetorical history (RH) is defined as the strategic use of the past as a persuasion strategy to manage an organization's key stakeholders. This study identifies several mechanisms by which rhetorical history fails during the study period. Major research findings include a single-authored book entitled "Mechanisms of Organizational Decline: Traps Caused by the Use of History," a presentation at the Academy of Management's Annual Meeting and its full paper proceedings paper, a paper that received the Sekigakusha Award, and a paper published in the Journal of Business Research.

研究分野：経営学

キーワード：レトリカル・ヒストリー

## 1. 研究開始当初の背景

レトリカル・ヒストリー（以下、**RH**）はレトリックとヒストリー（歴史）という二つの概念によって構成されている。レトリックはプラトンの『ゴルギアス』におけるレトリケー（ῤητορικὴ）以来、説得を目的とする言語技術とされてきた（**Burke, 1950**）。一方のヒストリー、歴史は、いわゆる物語りとしての歴史であり（**Foster et al., 2017**）それは過去に生じた出来事を完全に再現したものではなく、歴史の語り手自身の立場と関心によって出来事や行為に意味が与えられ組織化されたものである（野家, 2005; 貫, 2010; **White, 1983**）。こうした物語的歴史記述には行為論的機能が含意される。そもそも、近代以降の各国史における物語的歴史記述は、記憶の政治化を通じて、国民国家における国民形成装置として機能してきた（貫, 2010）。

経営者その他の、組織における特定の主体が、何らかの説得的な意図をもって組織の歴史を物語ることもまた、行為論的機能をもつ。組織における **RH** は、組織的同一化の促進、組織変革、経営戦略の正当化、顧客からのレピュテーション獲得、従業員の採用活動といった場面でしばしば実践される。**Foster et al. (2017)** によれば、**RH** の機能は 組織アイデンティティの変革・維持、真正性の獲得、正当性の獲得、組織文化の変革・維持の4つに分類される。近年、欧米の組織論研究者の間では、それぞれの機能に関する事例研究が徐々に蓄積されている（*e.g.* 組織アイデンティティ：Anteby & Molnár, 2012、真正性：**Brunninge, 2009**、正当性：**Suddaby & Greenwood, 2005**、組織文化：**Christianson et al., 2009**）。

こうした既存研究の殆どは、経営者が **RH** を実践することで彼らの意図通りにステークホルダーの行動を促すことに成功している事例を取り上げてきた。一方で、**RH** は常に使い手の意図通りに機能するとは限らない。第一に **RH** がそもそも聴き手に受容されない場合もありうる。第二に受容されても意図せざる結果が生じる可能性も考えられる。しかし、**RH** の失敗については、これまで殆ど研究蓄積がなかった。その理由として考えられることは、失敗事例において当事者が協力を忌避しがちで、一次データの収集が困難であることや、歴史を物語る際の聴き手の反作用（野家, 2005）についての考慮が不十分であることである。

以上の問題意識に基づき、研究代表者による端緒的な研究では、戦後の鐘紡を事例にとりあげ、一次史料や **RH** の聴き手も包含する幅広い **OB** へのインタビューをもとに、**RH** が失敗する場合のメカニズムについて、いくつかの要因を明らかにしていた。例えば、**RH** が聴き手によって受容されない場合の要因として、信頼性の欠如（**Matsuo, 2018**）、成果の期待の欠如（**Matsuo, 2018**）が見出されている。また、受容された場合でも、組織の歴史的な栄光を強調した場合に生じる逆機能が見出されている（松尾, 2017; 松尾, 2019）。

とはいえ、こうした研究代表者による端緒的研究が見出したことは失敗のメカニズムの一部であり、**RH** が失敗する場合、どのようなメカニズムで失敗するのかを包括的かつ精緻に明らかにしていく必要があると考えられた。

## 2. 研究の目的

本研究の学術的研究課題は、組織における **RH** が失敗する場合、どのようなメカニズムで失敗するのかを明らかにすることである。**RH** とは、組織の「重要なステークホルダーを管理するための説得戦略として過去を戦略的に用いること」と定義される（**Suddaby, et al., 2010, p.157**）。**RH** 研究は欧米の研究者を中心に研究蓄積が進みつつある領域であるが、既存研究は成功事例に偏ってきた。そこで本研究では以下の点を目的として、**RH** が失敗する場合のメカニズムを明らかにすることを目的とした。

より具体的には、失敗事例の事例研究と、学際的な理論的検討をもとに、失敗のメカニズムについての包括的かつ精緻な理論を構築することを目指した。

## 3. 研究の方法

上述の研究目的を達成するために、本研究でとった方法は以下のとおりである。なお、各方法については、それぞれ時期を区切らず研究期間中を通じて並行して取り組んだ。

## 《方法》

事例研究については鐘紡の事例研究を行った。鐘紡は戦前の本邦を代表する企業であったことから、戦後の経営者は様々な時期、状況で積極的に **RH** を実践していた。しかしながら、戦後は衰退し、**2004** 年には破綻に至っている。神戸大学経済経営研究所所蔵の一次史料や **OB** へのインタビュー、**OB** の自叙伝をもとに分析を行った。各時代における組織内外の環境を理解するために、経営史・経済史の学術文献、業界紙などの二次文献も渉猟した。

学際的な理論検討については、歴史哲学、修辞学、物語論、組織論等、**RH** に関連する各領域の既存研究を幅広く検討した。組織論について具体的には、組織学習論、組織アイデンティティ論、組織的アイデンティフィケーション論、組織イメージ論、制度派組織論などの領域(ただし、それに限らない)のレビューを行った。学際的理論的検討によって、事例研究に際する作業仮説の設定や、発見事実にもとづく考察に役立てることが出来た。

## 4. 研究成果

本研究では、研究期間中に **RH** が失敗するメカニズムを包括的に明らかにした。**RH** が失敗するメカニズムに関して、次の二段階のメカニズムについて、事例研究からの発見事実と、学際的な理論検討をもとに包括的かつ精緻な理論を構築した。第一に **RH** がそもそも聴き手に受容されない場合のメカニズム。第二に受容されても意図せざる結果が生じる場合(特に不利益が生じる場合)のメカニズムである。

これらの成果は、書籍、海外での学会発表、海外学術誌での論文掲載といった形で発表した。主な研究成果としては、『組織衰退のメカニズム：歴史活用がもたらす罨』と題する単著書籍(2022年)、**Academy of Management** の **Annual Meeting** での発表およびフルペーパーの論文(2019年)、**Journal of Business Research** に掲載された論文(2022年)などが挙げられる。

## 引用文献

- Anteby, M., & Molnar, V. (2012). Collective memory meets Organizational identity: Remembering to forget in a firm's rhetorical history. *Academy of Management Journal*, 55(3), 515–540.
- Brunninge, O. (2009). Using history in organizations: How managers make purposeful reference to history in strategy processes. *Journal of Organizational Change Management*, 22(1), 8–26.
- Burke, K. (1950). *A Rhetoric of Motives*. George Braziller.
- Christianson, M. K., Farkas, M. T., Sutcliffe, K. M., & Weick, K. E. (2009). Learning through rare events: Significant interruptions at the Baltimore & Ohio Railroad Museum. *Organization Science*, 20(5), 846–860.
- Foster, W. M., Coraiola, D. M., Suddaby, R., Kroezen, J., Foster, W. M., Coraiola, D. M., Kroezen, J. (2017). The strategic use of historical narratives: A theoretical framework. *Business History*, 59(8), 1176–1200.
- 松尾健治 (2017). 「組織における成功の歴史と衰退に関する研究—鐘紡の事例—」神戸大学大学院経営学研究科, 博士論文(学位授与番号: 甲第 6834号)。
- Matsuo, K. (2018). When rhetorical history fails to be accepted: A case study of Kanebo in the 1950s. *Proceedings of IAC 2018 in Budapest*, 154-162.
- 松尾健治 (2019). 「レトリカル・ヒストリーの意図せざる結果についての歴史的事例研究」『碩学舎ビジネス・ジャーナル』41, 1-17.
- 野家啓一 (2005). 『物語の哲学』岩波書店。
- 貫成人 (2010). 『歴史の哲学—物語を超えて』勁草書房。
- Suddaby, R., Foster, W. M., & Trank, C. Q. (2010). Rhetorical history as a source of competitive advantage. *Advances in Strategic Management*, 27, 147-173.
- Suddaby, R., & Greenwood, R. (2005). Rhetorical strategy of legitimacy. *Administrative Science Quarterly*, 50(1), 35–67.
- White, H. (1983). *Metahistory: The historical imagination in nineteenth-century Europe*. John Hopkins University Press.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 MATSUO, Kenji	4. 巻 2021-02
2. 論文標題 How a CEO's Autocratic Leadership Affects Exploitation and Exploration	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Discussion Paper Series (Graduate School of Administration, Kobe University)	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 MATSUO, Kenji	4. 巻 2019-16
2. 論文標題 Why and How Stretch Goals Affect Organizational Search Negatively	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Discussion Paper Series (Graduate School of Administration, Kobe University)	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松尾 健治	4. 巻 89(45)
2. 論文標題 レトリカル・ヒストリーとその失敗のメカニズム 見過ごされてきた論点と今後に向けた方法論的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 経営学論集(Web版)	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24472/abjaba.89.0_F45-1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 MATSUO, Kenji	4. 巻 #17292
2. 論文標題 Mechanisms of Failure of Rhetorical History Targeting Internal Organization	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2019 Academy of Management Annual Meeting Program (Academy of Management)	6. 最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsuo Kenji	4. 巻 140
2. 論文標題 When a dominant CEO hinders exploration in a firm: A longitudinal case study from Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Business Research	6. 最初と最後の頁 143 ~ 154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jbusres.2021.11.042	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 MATSUO, Kenji
2. 発表標題 Mechanisms of Failure of Rhetorical History Targeting Internal Organization
3. 学会等名 79th Annual Meeting of the Academy of Management (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松尾健治
2. 発表標題 組織におけるスティグマとレジリエンス
3. 学会等名 日本経営学会第93回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松尾 健治	4. 発行年 2022年
2. 出版社 白桃書房	5. 総ページ数 470
3. 書名 組織衰退のメカニズム：歴史活用がもたらす罨	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------